NPO 法人
日本･デンマーク
生活研究所【会報】
第１８号（2016 年４月）
発行人　千葉　忠夫

住みよい幸せな国づくり

民主主義への道　１

理事長　千葉忠夫

・北欧行き思い立った夜学生時代

今から半世紀前、当時私は仙台の夜間大学に在籍していた。文字通り昼間働いて夜学に通う勤労学生であった。級友となぜ我々は昼の学校にいけないのか、なぜもっと生活しやすい社会がないものかなどと、それこそ夜を徹して話し合ったものだった。

そんなある日、北欧に社会福祉国家があるということを耳にした。社会福祉国家とはその国の国民全ての生活が「揺り籠から墓場まで」保障されているというのであった。私は見知らぬものに一目惚れしてしまい学校を卒業したら北欧へ行こうと決めた。行って自分の目で、自分の体で生活しやすい国とはどんな国なのか確かめたかったのである。

自分が確かめたものを日本に持ち帰れば日本は住み良い国になると、私は単純に信じ、卒業後一年間をかけて渡航のためのお金を工面した。当時ヘルシンキまでの片道切符だけで２６万円もした。

・反対の両親に「自分は無鉄砲で行くから安心を」

私の両親は二人とも明治生まれで、私が日本を出るときはすでに７０代後半になっていた。私が北欧に行くと言ったら当然のように二人とも反対した。夜学を出て取れる資格はだいたい取っていたのでそのうちの何れかの仕事を選ぶことを望んでいたからだ。更に反対した理由は私が片道切符で行くということと５００ドルしか持ち出せないことだった。そして何よりも一番懸念したのは北欧に誰も知っている人がいないということであった。

明治生まれの両親を説得するため私は言った。父や母と同年代の夫婦の息子たちはかって御国のためにと鉄砲を持たされて外国にやられたけれど、自分は無鉄砲で行くのだから心配は無用と説いた。善意は見知らぬ土地でも通じる、扉はたたけば開かれる、精神一到何ごとかなさざらん等と古い言葉をまくしたてたら、何とか納得してくれた。

・昭和４２年、バイカル号に乗り込む

昭和４２（１９６７）年４月１４日、ちょうど美濃部都知事が初当選した年に私は横浜からソ連船バイカル号で出国した。船上のバンドが蛍の光を奏で始めると見送りに来ていた友人や家族に絆として投げつけた５色のテープがプツンプツンと切れ、彼らの姿は桟橋とともに春霞みの彼方に遠のいていった。

船内放送で私の名前が繰り返し呼ばれているので我に帰った。ここはすでに日本ではないのだと。いきなり船長室への出頭命令に前歴がばれたかと愕然としたものだった。覚悟を決めて船長の前に出ると私を日本人船客の団長に任命するということであった。なんてことはない船長の伝達係兼今で言う添乗員をただ働きさせられたわけである。

しかし船倉に閉じ込められるよりはまだしもましだと自分を納得させて、以後ナホトカで下船してモスクワ、レニングラード経由でソ連圏を出てフィンランドのヘルシンキに着くまでその仕事をすることにした。

当時海外旅行が解禁になったばかりの年で２０数名の日本人たちが一団体をなしていた。大学を中退あるいは休学して無銭旅行をしようとする若者がほとんどであった。夜学時代の友人佐々木平紀君もその一人だ。みんな大きな登山リュックを背負い登山靴にジャンパーという出で立ちである。

・フィンランド。残雪のかたわらで日光浴

ヘルシンキでの宿は当然ユースホステル。日中皆で街に職探しに繰り出す。若者たちは街のレストランで皿洗いの仕事を探し２～３ヶ月働いて旅費を貯め次の国へ旅行するというのが当時のパターンであった。私も街に仕事を探しに出るのだが、育ちが良かったせいか？人が食べた皿を洗わしてくれとはどうしても言いかねたのだった。

３日しか滞在できないヘルシンキのユースホステルを後にヒッチハイクで次の街へと向かった。４月の下旬だというのに天気がよい日は残雪の傍らで日光浴をしているフィンランド人には驚かされた。次の町でも職は見つからず、持ち出した５００ドルは毎日確実に減っていった。寒いフィンランドをあきらめ、スウェーデンへ渡ろうと決めた。

・スウェーデンでも仕事は無かった

日本を出るとき、北欧ならどの国でも職さえ見つかれば滞在しようと考えていたのだが、そう簡単に職は見つからなかった。明治生まれの親の顔を思い出し、自分の言ったことに責任を持たなきゃいけないと言い聞かせ続けた。

しかしスウェーデンでの３日間を通して結局何も見つけることができなかった。ストックホルム大学の前を通りすがりにこの大学で学べたらなあなどと白昼夢を見た。

この時私はなぜか動物本能的にスウェーデン人は

冷たいと感じた。このことは社会福祉国家とは何の関係もないことかも知れない。後にデンマークから研修でスウェーデンに入り、スウェーデン人は冷たいのではなく何ごともフォーマルなことを好む人類であることを後に知った。同じ北欧の社会福祉国家デンマークとの違いがそのときは何であったのか分からなかったのである。

・1967年４月29日、ついにデンマークに入った－３日間で仕事を見つけよう、私は焦った－

１９６７年４月２９日、ストックホルムからの夜行列車は早朝ハムレットのモデル城のあるヘルシンガーに到着した。今からちょうど４９年前になる。もはや生か死かなんて言っていられない心境だった。ずばり背水の陣で私はデンマークに乗り込んできたのだ。

日本出発の時、北欧を目指したが私の胸の中にはいつもデンマークがあったのだ。見知らぬものへの一目惚れである。酪農国、アンデルセン、デンマーク体操等以前からデンマークと関連して聞いていた言葉はこれくらいなもので私が知りたいと焦れた社会福祉国家についての情報は何もなくその本家本元に来てしまったのだ。

ヘルシンガーからコペンハーゲンに向かう列車の窓に私は吸い付くようにして、惚れて目指してきたその国を見ていた。地平線まで広がる緑に点在する赤や黄色のレンガ造りの家、澄み切った青空、これぞお伽の国と思われた。

しかし、コペンハーゲン中央駅に列車が到着するや私の背水の陣の闘いは現実となって始まった。列車のコンパートメントで一緒だったインド人でサンスクリット語の教授が予約してあるホテルがどこかわからないという。私も初めて着いたばかりのコペンハーゲンであったが、自分のリュックサックを駅のベンチに置いて彼のホテルを探してやった。幸い、ホテルは駅のすぐ前だったので時間も取らず、ベンチに置いた荷物も私の帰りを待っていてくれた。ホテルに泊まれる教授を羨ましく思ったものである。

今日から３日間のうちに仕事を見つけないことには一巻の終わりだ。そう思ったとき、試験のとき問題が解けず残り時間がもう無くてどうしたいいのか分からないときと同じような心理的肉体的危機感みたいなものが身体中を電流のように駆け巡った。

まずはユースホステルを地図上で探した。当時コペンハーゲンに在った路面電車の２番に乗ってホステルに着くと直ぐ職探しのため街に出た。犬でさえ歩けば棒に当たるというのに、何も得ることもないままに、デンマーク第１日目の草鞋を夕方遅くに脱いだ。

２日目もただ街中を歩き続けた。棚からぼた餅なんて落ちてこないということが良く分かった日だった。ユースホステルでの朝食以外はすべて外食、大きな食パンを買い、イワシの缶詰めを見つけておかずとし、何となく恥ずかしかったので公園のなるべく隅のベンチに座って食べた。これではレストランの皿洗いの仕事にありつけないわけである。あと一日しかない、とても眠れぬ夜のはずであったのに昼の疲れが体を襲い眠りが私の悩みを一時忘却させてくれた。

ついに３日目。潜在意識の中に在る危機感が目覚まし時計よりも先に私を叩き起こした。今日が最後だ。誰だ、祈らずとても神は守らんなんて言ったのは。神様に対して失礼だけど、いらっしゃるのなら祈りたい気持ちの私だった。

この手記は月刊「権利闘争」（権利問題研究会発行）に連載されたものです。転載の許可をいただきました関係者の方々に感謝いたします。

＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊

～Weekend Folkehøjskole in Chiba
第６回研修塾の報告（承前）

副理事長　茂木俊郎

参加者のご意見

Ａ）日本の将来を本気で考える人たちが、デンマークと比較し、どうしたら幸せに働けるかを考えましたが、そのような考え方を多くの人々の心に響き民主主義で平等な国となってほしい。前向きな人々に会えて元気をいただきました。（65 女性）

Ｂ）自分が「人間らしい働き方」のテーマに予測していた内容と違っていました。日本企業、日本社会の労働者の労働条件や、日本人が美化している”働き方”について”人間らしさ”とは何か、また幸福感を得られる”働き方”などのお話があるのかと思っていました。それをＤＫとの比較があるのかなぁと思っていました。福祉業界も厳しい労働条件は続き、ソーシャルワーカーやケアマネもサービス残業は当たり前の現状。福祉の人材不足は進むばかりで、働いている人をどう守れるのか、また自分自身の働き方を変えていけるのか、課題に思っています。ご準備含め、ご尽力ありがとうございます。（女性）

Ｃ）国民が国家を信用している国か否かが根本的な違いであるように思った。信用していれば税金が高くても払う。日本では信用していないから払いたくない。（７０　男性）

Ｄ）今回３回目の出席となりましたが、デンマークの良さが多く、日本も弱者に対する政策や、老後の生活が良くなるようにしたいと思います。（69　男性）

Ｅ）日本も社会のセイフティーネットを何とかしなくてはならないと思います。今の政府に社会保障を期待して預金をあずけるようなことは決してできな

住みよい幸せな国づくりのヒントを探して

仙台大学客員研究員　高橋まゆみ
（デンマーク在住）

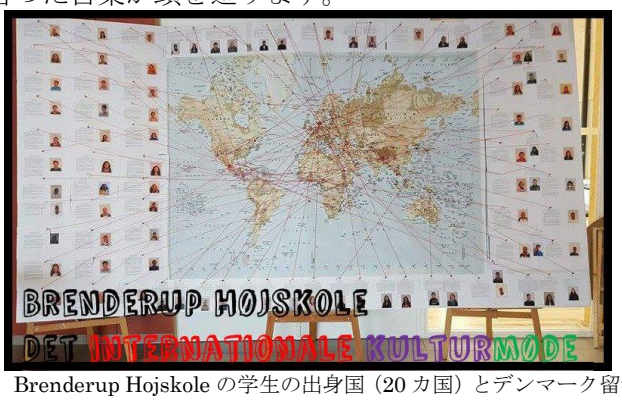
［第一話ご近所付き合い］

皆さん、こんにちは。私は日本で 25 年ほど仕事経験を得た後で、デンマークに移り住み約 8 カ月になります。以前からデンマークの教育に関心があり、1 年間のリサーチ滞在も含めて何度か訪れており、そのたびに新しい発見がありました。移り住んで間もないのですが、住みよい幸せな国づくりのヒントを探して、まずはアウトサイダー的に、デンマーク社会の景色や表情から参考になることや感じたことをデンマークの地からお伝えしていきたいと思います。

デンマークでは、昨年 2015 年 6 月 18 日に国民議会総選挙が実施され、これまでの社民党・急進自由党の連立政権から議員数第三の党ながら自由党単独政権へ政権交代し、6 月 28 日に第二次ラスムセン内閣が発足しました。新政権の政策基本方針では、安心・安全、医療、高齢者福祉の充実を優先課題としています。しかし、一方で外国人政策の厳格化等の方針を打ち出して、難民受け入れに対する方針に様々な波紋を起こしているのも事実です。難民受け入れのあり方に対して、国民からは人道的支援の国デンマークらしくないといった批判的な声も聞かれます。

世界情勢の激変する中で、政権交代により政府の方針が変化しようとも、デンマーク人が伝統的に受け継いできたものはそう簡単に変わるものではないと思います。「デンマークは日本に比べるとセーフティネットが行き届いているので、誰でも安心して暮らせる住みよい国！」と言われます。確かに制度的に行き届いていると感じます。ただ、制度が整っているから人々に安心感をもたらしているのかと問われれば、そのことだけをもって「安心で住みよい」とは答えられません。共通の趣味の仲間やご近所さんとのネットワークをどれだけ保っていけるのかが鍵になるようです。

デンマークの美しい景色を楽しみながら街を散歩していると、デンマーク人は知らない人同士でも笑顔で「God dag!こんにちは！」など挨拶を交わし、温かみや親しみを感じさせてくれます。これだけでも安心だと思えるのは私だけでしょうか？また、デンマークは、これまでもそして現在も外国から多くの移民や難民を受け入れています。多様な文化的背景を持つ社会で、人々はどのように生きることが互いに住みよくなるのかを考えながら行動することが求められていると実感します。生きやすさ、安心感、助け合い、共生、協力、公平、連帯、博愛…以前、習った言葉が頭を巡ります。



Brenderup Hojskole の学生の出身国（20 カ国）とデンマーク留学の目的と将来の夢を記載したマップ（スペインからのリサーチスタッフである Mercedes 氏と学生の共同作製による）

デンマークのセーフティネットは、ご近所付き合いにはじまるように、デンマーク人の受け継がれてきた知恵があってはじめて機能しているように感じます。他人と上手く付き合い、笑顔で楽しく生きるにはどうすることが大切なのかということを子供の頃から経験によって学んでいるのです。この後、私はデンマークの子どもたちと一緒に、生活の何かを学びながらひとつずつ経験を積んでいきたいと思います。

＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋

いと思いました。（57　女性）

Ｆ）３人の方からデンマークについて詳細を聞けて、より深く理解できました。日本人はもっと日本の政策について関心を持ち、少しでもデンマークの良さを取り入れてほしい。

Ｇ）ピア・ジァンセンさんの具体的な講演で日本の状況も勉強してみたいと思いました。どこにお金をかけるかといつも現状を残念に思っている。

Ｈ）初めて参加させていただきましたが、いろいろ刺激を受けました。感じること、考えることもあり、良い経験となりました。このような機会がもっとあったら良いなと思いました。本当にありがとうございました。今回の経験を仕事やプライベートに活かしていきたいです。年齢を超えた交流はこのような機会じゃないと難しいので、自発的に参加していきたい一方、声をかけていただきたいと思います。（２０代　女性）

Ｉ）毎回感じることは、参加される皆さんから多く学ぶことが沢山あります。それだけでも参加して良かったと思います。グループ討論でフィードバックできる感覚を身体で感じられ、昨年より議論は深まったと思う。岩田さんの問題提起は大変参考になりました。沢山の政策のためのヒントが入っていると思います。ピアさんの講演はビデオプロジェクターが使えなくて残念でした。他の会場で講演されたビデオがあれば、手に入れば大変ありがたいです。（６０代　女性）

Ｊ）高い理念(理想)をかかげて、コツコツと実践し

河津桜の蜜を吸うメジロ

待機児童問題に思うこと

副理事長　茂木俊郎

一人の母親の怒りが政治を動かそうとしている（かのように見える）。「保育園落ちた、日本死ね！」の書き込みに始まる一連の動きである。待機児童を無くすためには保育施設の増設が必要だが、保育士の待遇改善が前提だと言われている。労働者平均より 10 万円低いという賃金を平均まで上げるのに 3600 億円必要だが､財源がないという。だが税金を使った与党の選挙運動だと批判された高齢者への 3 万円ずつのばらまきを止めれば作り出せる金額だそうだ。

匿名の書き込みは誰が書いたのか、本当のことか分からないという首相の冷酷な対応に国民の怒りは燎原の火のように拡がった。

5 月の参議院選挙への影響を危惧し危機感を抱いた政府は待機児童対策を促進すると言い始めた。たぶん選挙公約にも盛り込まれるだろう。

だが、と思う。今まで何十回繰り返されてきた国政選挙で、反故にされた公約の何と多いことか。当選するために守る気の無い公約を言い募り、都合の悪い本音は目立たない程度に触れ、当選した暁には本音の実現に邁進する。

公約は口約に過ぎない、当選のための方便だと言い放った政治家もいた。

やはり私たちは、民主主義の内実を求めていかなければ、福祉社会の実現も難しいのだろう。

ている方々がいることに感激しました。（64　男性）

平成 28 年度総会のお知らせ

NPO法人　日本･デンマーク生活研究所の平成 28 年度総会を次のように開催します。

日時：５月２１日（土）１５：００～１７：００
会場：ＴＫＰ東京駅丸の内会議室
　　カンファレンスルーム４
（東京都千代田区丸の内 3-1-1　帝劇ビル B1F
・ＪＲ線　『有楽町駅』徒歩 2 分
・地下鉄『日比谷駅』『有楽町駅』B3 出口直結）

同封のハガキにて出欠を５月１０日までにお知らせください。欠席の場合は同ハガキの委任状に署名捺印をお願いします。

また総会終了後帝劇ビル内の中華料理店「桂園」にて懇親交流会を予定しております。会費は税込で４０００円です。こちらの参加希望も同封ハガキにご記入ください。

～Weekend Folkehøjskole in kagoshima

第 7 回研修塾 in 鹿児島　のお知らせ

今年の研修塾は鹿児島の会員のご努力をいただき鹿児島市で開催することになりました。

日　程：9 月 16 日(金)午後～18 日(土)正午
会　場：レインボー桜島
テーマ：どうなる社会保障(仮)
講　師：アンニャ・ロン・クリステンセンさん
　　(デンマーク、北フュン市議会議員、同市議会社会福祉委員長)　他（交渉中）
参加費：(2 泊 3 日) 33,000 円・会員 30,000 円
　　3 日間通い、1 泊 2 日の参加も可能です。
　　2 日目シンポジウムのみ参加　1,500 円
　　1 日目懇親会のみ参加　5,000 円

通い、１泊２日の場合の参加費を含め詳細は次号でお知らせします。どうぞ参加を予定しておいてください。

２７年度に寄付をいただいた方

千葉勝子様、川島正仁様、茂木俊郎様よりご寄付いただきました。ありがとうございました。

事務局長・会計担当　前田正志

編集後記　★ 28 年度が始まる。千葉理事長の半自伝、高橋さんのデンマーク・リポート、二つの新連載が始まった。次号以下も乞うご期待。★3 月 18 日、国連は 2016 年度版世界幸福度報告書を発表。デンマークが 3 度目の世界一幸福な国になった。★スイス、アイスランド、ノルウェー、フィンランドと続きスウェーデンも 10 位である。★日本はと言えば、前回の 43 位から 53 位へ大きく順位を下げた。残念だが、この結果に納得せざるを得ない 1 年だったとも思う。★編集作業を終えて一息ついていた所へ届いたニュース。後記を書き直す時間があって良かった。（茂木）

発行所
〒292－0801
千葉県木更津市請西4－6－9
Tel:0438-36-3565
お問合せTEL090-9827-9262
茂木俊郎
NPO法人ホームページ
http://www.djsli.com
メールマガジンの申し込みはホームページからお願いします。